

## 中国民間演劇の再燃

磯部 祐子\*

### 要 旨

小論は、2003年の現地調査に基づき、中国浙江省紹興における民間演劇の再燃について考察を加えたものである。改革開放後、経済の自由化と共に、それまで息を潜めていた民間の芸能活動は復興の兆しを見せた。爾来20年、今日、江南では、中華人民共和国成立以前の活況さえも彷彿とさせるほど民間芸能の盛んな地域も生まれ始めた。小論は、調査を行った5つの事例によって、今日の紹興における演劇の上演状況と宗教との関わり、伝統の継続性と異質性、そしてその背景にある人々の精神世界について明らかにする。

キーワード：民間演劇の復興、紹興、上演状況、宗教、伝統の継続性、精神世界

### 1：はじめに

紹興は、魯迅の「宮芝居」(『呐喊』)で知られるように、人々の暮らしに根ざした演劇の盛んな地域であった。しかし、「宮芝居」の原題「社戯」が示すように、宮芝居は「社」すなわち土地神を祀る行事であり、土地神ばかりかあらゆる神仏(現地の人々は神仏を「菩薩」とよぶ)の誕生日にも廟を中心に奉納演劇が行われたがために、社会主義を標榜する1949年以降の紹興では、民間演劇が行われることはほとんどなかった。

1996年、浙江省蕭山市の宣卷調査の折、消滅したと思われていた宣卷の復興を目の当たりにし、同時に民間演劇が人々の生活に戻ってきたことを知った(注1)。しかし、そのことを具体的に記した報告書を目にすることはほとんどなかった。現地での調査を思い立って7年の月日が流れた。改革開放とともに復活したというあまたの民間職業劇団は、その後どうなっただろうか。晩夏とも初秋とも決めがたい本年9月の半ば、演劇状況の調査を目指し紹興に発った。本稿は2003年9月の紹興における民間演劇の実見をもとに、今日の地方劇の現況とその意味について考察するものである。

なお、調査には、現地での長年の知人である、紹興市芸術研究所の謝涌涛氏の協力を得た。謝氏は、劇団の美術担当でありながら、地道なフィールドに基づく紹興における戯台調査の専著『紹興古戯台』(注2)の著者でもあり、筆者とは10年ぶりの再会となる。

## 2：解放娘娘と人々の祈り——紹興県東浦鎮青龍村——

今日の民間演劇について、前掲の謝氏はすでに「改革開放後、それまで衰微していた民間の芝居はかなり復興した。1995年の調査でも浙江には500種の民間の職業劇団があり、台州の一地域だけでも一年に3万6000回の上演があった。紹興でも、周辺の県では、毎日さまざまな芝居が演じられている」（注3）と記している。その言に違わず、9月13日にも、紹興の市街地にさほど遠くない紹興県東浦鎮青龍村では奉納芝居が演じられているとのことであった。多くの民間演劇は、昼と夜の2回上演が主である。急いで昼食をすませ、タクシーとオート三輪を乗り継ぐことになった。

目的地の草台（臨時舞台）は、小川に面した小路を遮る形で設けられていた。競って元宝を持ってくる年輩の女性たちに、「今日は何の日か？」と問えば、菩薩の誕生日と口々に言う。菩薩はその名を「解放娘娘」と言う。しかしその菩薩の由来たるや諸説紛々。曰く、病から解放してくれた神と。曰く、毛沢東と。曰く、新たな願望大帝と。一人一人の解釈に疑念を抱く筆者に、一人の老婆はきっぱりと言った。「何でもいいじゃないか、あらゆることを解放してくれる神だよ」と。その一言を聞いて妙に納得し、菩薩の所在を尋ねると、「4、5キロばかり離れたところにある、見龍寺という寺」と告げられる。しかし、オート三輪で乗り付けた先にはふくよかな弥勒様が鎮座し、「善有善報、悪有悪報」と因果応報の教えが記されているのみ。果たしてそれが解放娘娘と何の関係があるというのか。土地の人は心の中の菩薩を近隣の寺廟に存在するものと思込んでいたに過ぎなかった。しかし、思えば、民間の菩薩とは本来そのようなものなのかもしれない。当初、人々の心の中にあった無形の神は人々の希求によってやがて偶像化されることになる。この「解放娘娘」は、その初期段階の菩薩に当たるのである。

見龍寺から戻り、舞台の前に設けられた机の上に目をやると、果物、元宝、灯明が賑やかに飾られ、紙銭が焚かれ、「解放菩薩」に供えられていた（写真1）。爆竹が鳴り響き、開演に先立ち「三喜臨門」という字幕が舞台の左側に置かれた。八仙に扮した役者が、拍板のリズムに合わせて縁起を祝い始めると、100数十人の観客は、持参した竹の椅子に座り、一斉に演者に目を凝らした（写真2）。以下は祝いの縁起である。

「保佑呀，保佑呀。合家老小，一年四季无灾无难。

保佑呀，保佑呀。老年人，增福增寿，白头发会转青，落下牙齿可生根。

保佑呀，保佑呀。小人，快长快大，日后大学考进。

保佑呀，保佑呀。年青人，出门营生，一本万利。日赚金，夜赚银，财神菩萨后面跟。

保佑呀，保佑呀。出来子孙，名牌大学考进。出国留学稳笃定。中央接班人来当进，飞机坐坐来接双亲。

保佑呀，保佑呀。年青人，生意做遍五大洲、亚洲、欧洲、南美洲。今年造起三层楼，每年买来别墅楼。团团圆圆走马楼，合家老小乐悠悠。」

（「守りあれ、守りあれ。家族みな一年中つつがないよう。

守りあれ、守りあれ。年寄りたちは長生きし、白髪も黒くなり、抜けた歯は生え変わるよう。

守りあれ、守りあれ。子供らが早く成長し、将来大学に受かるよう。

守りあれ、守りあれ。若い者は商売に支障なく、昼夜問わず金がもうかり、銭神様が着いてくるよう。

守りあれ、守りあれ。家を離れた孫や子は、有名大学に合格し、外国留学がうまくいき、出世の

道に着くよう。そしてやがては飛行機で両親を迎えに来るように。

守りあれ、守りあれ。若い者は五大陸、アジア、欧州、南米と、世界をまたいで商売し、今年  
は三階建ての家を建て、毎年別荘を手に入れて、家族みな立派な家で生活し、一家は団欒、  
悠々自適であるように。』)

前半は「en」「in」の韻で合わせ、後半は「ou」の韻でまとめ上げられたこの唱いにこめられ  
たものは、無病息災、学業成就、商売繁盛、立身出世である。その中で子供が有名大学に合格  
し、留学するのを祈願するのは、今日的祈願であると同時に、科挙登第を願う人々の意識と何  
ら変わりはない。

元宝を抱えてきた女性は、願を掛けたら叶ったので、還願（願ほどき）に元宝を50元分持っ  
て来たと言った。また、赤ん坊を抱えた若い女性は、無事赤ん坊が生まれたので、奉納芝居の  
ために100元醸出したと言った。それぞれの神への祈りと感謝が娯楽と一体になり、秋空の下  
に紹劇のメロディを鳴り響かせるのだ。

劇団員は、楽器の5、6人を含めて全部で13人。かつて紹興越劇団で演じた仲間だという演  
員たちは、舞台裏の化粧も手際よく、客に芝居のメニューを渡し、本日の出し物を選ぶ（“挑戯”）  
ようにと促していた。

選ばれた芝居は何か、紹興劇の慷慨激昂する口吻に触れることができるのではないかという  
期待をよそに謝氏の携帯が鳴った。「徐文長の墓の近くにある紹興県蘭亭里木柵（村）で大規模  
の芝居があるから来い」との誘いが携帯からも聞こえた。

### 3：父母の還暦を祝う慶寿演劇——紹興県蘭亭里木柵（村）——

五時過ぎ、蘭亭里の会場へ急ぐ。途中、午後の一芝居を見終えて、夜の開演に間に合うよう  
に食事に戻る人々に出会った。蘭亭里木柵は、王羲之の蘭亭序で有名な土地でもある。

秋の空は少しずつ薄暗くなり、夕闇に覆われ始めた夜7時前、500人を超える人々が集まって  
きた。村の人口は200人程しかいないというから、近隣の村からも芝居好き（戯迷）が足を運  
んだに違いない。それもそのはず、本日は、海外でも何度も公演の経験をもつ越劇で最も有名  
な「紹興小百花劇団」による上演である。総勢53人の大規模な出演者群。主催者はこの村出身  
の一人の男性。レストランの経営者になり、かなりの富を蓄えたので、今回は村の人々を集め  
て、父母の還暦を祝うとのこと。出演料は2万元。製茶工場の敷地を借りての大舞台は、鉄の  
棒で組み立てられ、牢固なものである。

7時、開頭場（一番囃）。大銅鑼などによる「開頭場」を奏で、観客を舞台に集中させると、  
爆竹が鳴り、ついで打ち上げ花火が降り、縁起ものの飴が撒かれて、賑やかな慶寿劇が始まっ  
た。

最初の出し物は「夜明珠」。電光による字幕には、老人へのいたわりが説かれている（写真3）。  
これは、いわゆる「開二場」（二番囃）と呼ばれるもので、小銅鑼や管弦が加わり、慶寿と官界  
出世、科挙及第があわさった縁起芝居である。裘士雄らの『魯迅筆下的紹興風情』（注4）はこ  
の「開二場」について、「（村芝居では）『五場頭』（開二場）のような縁起芝居を省くと、必ず  
村方から抗議が出た」とあり、今尚その形式がひきつがれていることが分かる。しかしこれは  
「慶寿劇」であり、開始時舞台の下には赤く大きな灯明が何本も並べられてはいたが、宗教色の  
強い村芝居とは異なって、菩薩の神座はなかった。

二つ目は「穆桂英挂帥」。これは、「楊家将演義」から生まれた芝居で、本日の主要な出し物。

宋の時、楊家の女将、穆桂英が男装して全軍の指揮を執り、困難を救うという話（写真4）である。

越劇団の美女たちの洗練された立ち廻りに観衆は魅せられ、時折、蚊に刺された手足を掻きながらも、目は釘付けとなり、夜空に鳴り響く拍手は止まない。

観客となった謝氏と私に劇団長は、飲料水のペットボトルを手渡してきて「忙しいですよ、次から次へと呼ばれて」と嬉しい悲鳴を挙げながら、終演後は南京から来た友人の自家用車に乗って帰るよう私たちを促した。真っ暗な夜道に、椅子を小脇に抱えた近隣の人々が一列に並び、家路についている様が、車窓から窺えた。

女性演者による越劇のもつ嫺やかさ、恋愛を主とした芝居内容、方言の分かりやすさなどが、観客を惹きつけるのであろう。

それにしても、主催者は何故かくも盛大な催しを開いたのか。父母の還暦を祝うことが主眼であろうが、土地の人々は、「商売繁盛した姿を近隣の人々に知ってもらうため」と言う。世俗性に重きが置かれているというのである。田仲一成氏は、（明代末期の安徽省の例を挙げ）宗族内で行われる寿誕演劇が社祭演劇などを凌駕して盛行し、その後清代初期に入って、急速に拡大し、多くの江南宗族の間で普及するようになったといい、その盛行の理由の一つとして、「大宗祠で演劇を挙行することにより競争関係にある近隣の宗族や雑姓郷民に対して自己の富力を誇示し得ること」（注5）としているが、これは今日の戯曲盛行の理由と大いに類似する。“富力”を手にしたレストランの経営者は、科挙合格者が出たと同じような出世の喧伝、“富力”の誇示を、演劇上演を通して行うのであろう。この時、神への感謝は薄らぎ、世俗性や娯楽性が色濃く現れることになるのは否定できない。

#### 4：潮神の生日を祝う——紹興県馬鞍山湖塘——

神とは、人間の存在するところ、何処にでも存在するものようである。確かに紹興では、連日のように何処かでその誕生を祝う芝居が演じられていた。

紹興二日目の農曆8月18日は、紹興近辺では潮神の誕生日を祝う日である。紹興県馬鞍山湖塘墩でも、道沿いの空き地に舞台が設えられていた。これは、紹興益泉鋁泉飲料会社の経営者が潮神の誕生とこの一帯の安寧を祈って開くのだという。一方、前述したようにこの飲料会社の“富力”を誇示するイベントであることも否定し得ない。

開演前、八仙に扮した演者は、舞台の前にある祠の菩薩像の前に並んだ。菩薩の前の机には鱸魚、豚、鳥、バナナ、梨などが置かれ、チャルメラにあわせて8人の演者が縁起を説き、「菩薩保祐、全家太平、身体健康、長命百歳、生意興隆、夫妻恩愛、白頭到老、恭喜發財、子孫出山」と合唱した（写真5）。メロディは宝巻調（南無調）と説明を受けたが、抑揚のない単調なものである。

やがて、演者8人は廟に面して立てられた舞台に向かった。舞台は竹で骨組みされ、板を並べてある簡素なものだ。楽隊4人（打楽器2人、二胡1人、琵琶1人）が登台するころ、西に日が傾き始め、人々が集まり始めた。小脇に竹椅子を持ってくるところはいつも同じ。村民300人ほどと聞いていたのに、もう既に100人を超す観客がそろった。劇目は「大華山救駕」という、皇帝の美女選びに端を発し、臣下の策略と王位篡奪、紛争が繰り広げられ、最後は皇太子が事を解決するというもの。依拠する物語は知らないが、紹興方言によるアドリブを巧みに織り込んだ演技は、年輩の男女の人気を博していた。美女に扮した年増女優のお嬢さん役に

つられ、老婆たちは大きな口をあけて笑い始める。演者と観客の一体感とでもいうものがそこにはある（写真6）。

総勢14人のこの劇団の、核になるのは俳優3人に楽器担当1人。芝居主催者の要求に応じて退職した友人や、時間のある現役俳優を随時スタッフに加える。代表の1人は「もともと野鷄（もぐりの）劇団だったが、最近はオープンに戯班子（グループ）を組んでいる。人々は経済的にそこそこの生活ができると、神様へのお祈りが効いたのだと信じるようになる。そしたら、やっぱりお礼の芝居をしなくては、ということになる。劇文（芝居）を設けるのは周囲の人に対して鼻も高いし、縁起もいい。おまけに楽しいし…。それで私たちは招かれるのだ」と分析した。

芝居が紹興一帯では、いまだに「戯文（シーウェン）」と呼ばれていることに驚いた。南宋の初め、温州一帯に興った地方劇の文学史的言い方が、今日の芝居を指しているのである。

一方、退職者による劇団編成は、中華人民共和国成立以後、国が地方劇の後継者の養成を推し進め、地方劇担当者を根絶やしにしなかったことが功を奏することになったといえよう（注6）。そしてまた早期退職の勧奨、退職後の低い年金制度などが、戯班編成を促していることもその背景にあると思われる。

## 5：民間演劇再燃の背景

中華人民共和国成立後、舞台芸術を政治的に用いてきた中国は、改革開放後、戯曲劇団などの体制をいかに改革すべきか、中国の文化管理担当局は模索し続けている。結論として国の指導の下にある劇団は「社会効益第一、経済効果第二、力争実現両箇効益相統一」ということになるのだが、庶民の心理的な希求に基づいて形成され、発展してきた民間演劇が、社会効益の下に統制されるわけもない。

80年代以後、少しずつ、しかし堂々と復活した民間演劇は、かつての宗教演劇とは異なり、その地域に居住するものが「現世利益」、「願掛け」と「願解き」というきわめて原初的宗教心理を基軸とし、生活の安寧、繁栄のために神の保護を求めて、「戯文」を求め続けているように思える。

上述の調査から、最近の民間演劇の主たる目的は、①願解きの芝居、②（慶寿、子供の出生、大学合格などの）祝いの芝居、③平安願いの芝居、④神々の生誕を祭る芝居、の四つでないかと思われる。これは、長い間続いた中国における戯曲上演の目的となら異ならないだろう。もちろんその基盤には、同行の謝氏が、「人々が衣食住の問題を解決したのち、さらに生活の充実を願い、友人間の交際や意思疎通を求め、心を通わせ、ともに楽しみを享受しようとするもので、その中であって芝居を設けることは最適の手段で、テレビや映画もこれにとってかわることはできない。なぜなら耳に慣れ親しんだ伝統劇は、誰もが知っているストーリーと登場人物、そして人情味豊かなことばがあり、その後ひとときの語らいをも提供してくれるから（注7）。」と分析するように、紹興の伝統と化した戯曲の長い歴史がその背景にはある。

伝統と人々の生活習慣は一朝一夕に変えることはできず、むしろ年老いた人々は自分が生まれ育った生活習慣の中に精神の安定を覚える。人々の流動が少なく、人間の絆が変質しない比較的安定した地域において、その傾向はとりわけ強まるようである。

そしてもう一つ、その表の目的とは別に、芝居はある種の力の顕示という形で具現化される側面をもつことも窺えよう。前掲の芝居の幾つかは、富裕になった人々の資金によって催され

たものであった。そのことが示すように、「芝居を掛ける」のは富裕の象徴でもある。芝居を目にした観客はその主催者を讃え、上演の様は人々の口を経て近隣にも聞こえることになる。そこに価値を見出す人も少なからずいるのである。このことは、戯班の更なる復興を促し、地域的な芝居上演の高まりを更に促進することになる。

1995年旧暦2月21日、浙江省慈溪で開かれた相公菩薩の開眼供養の報告がある(注8)。なんと11日にわたり、20にも及ぶ劇を演じたという。演者は劇団員を中心に組まれた紹劇第一舞台であった。十三齡や銭慧韻などのかつての名優も登場し、近隣から集まった多くの人で賑わった。こうした正式の団に属し、技術を磨いた演者の存在と相俟って、近年の浙江の農村は、中華人民共和国成立後、かつてないほどの民間の戯班子が躍如しているのである。

野外演劇の醍醐味に触れながら“露台”すなわち“草台”が演劇を育み、中国戯曲の脈々と続く伝統を形つくり続けていることに思いを馳せた。康熙《南巡図》に見る紹興柯橋の精巧な戲台から、青竹でつくられた粗末な戲台まで、その種類は多様であるが、不特定の大衆を魅了する芝居は、その広い自然環境の中にあればこそ、俳優の「のど」が鍛えられ、一代の文化が形づくられ、多くの観客を手にし得るのであろう。

このような菩薩の誕生日と芝居上演について、前掲『魯迅筆下的紹興風情』には魯迅の時代の風景として、「廟会の行事は、土地神以外にも及ぼされ、芝居の上演時期も必ず春秋とは限らず、およそ菩薩(神仏)という菩薩の誕生日ごとに演劇の奉納が行われるようになった(注9)」と記されている。

#### 6：宝巻の上演——紹興市鏡湖区靈芝鎮の蔣家蚊(村)——

民間戯曲の復興は、その周辺の民間演芸全般の復興と軌を一にしている。宝巻の上演、即ち宣巻においても例に漏れない。宣巻についてのここ数年の論調は、例えば「現代民間宝巻的消亡」(注10)のようなタイトルでその消滅を必定と見るものが多い。しかし、前掲蕭山市の調査(注11)においても宣巻はなお行われていたし、蕭山市の隣に位置する紹興でも同様であった。今調査でも、宣巻の盛んな地域もあると聞き、紹興市鏡湖区靈芝鎮の蔣家蚊(村)を訪ねた。ここは、蔣姓の人が村人のほとんどを占める村である。

本来宣巻は、宗教的色彩の濃厚なもの(「宗教宝巻」)と、宗教的要素は残存させつつ娯楽的色彩が濃厚なもの(「民間宝巻」)とに大別できる。この地域では、後者の民間宝巻を、廟などを会場にことあるごとに行って人々の安寧を願うという。

淡水真珠養殖用の丸く白い浮きが浮かぶ河に面した廟には、祀られて間もないであろう理水將軍、三世先祖、天医華陀、白求恩の姿があった。理水將軍は、この地の水害を治め、三世先祖は現世過去世来世も見守る。天医華陀は古代の名医、白求恩は抗日戦争時、延安などで活躍したカナダ人の医者、毛沢東の著作「紀念白求恩」でその功績は広く知られている。それにしてもガウンを纏い、頭に赤い星を戴いている白求恩の姿には我が目を疑ったが、思えばこれぞ庶民の素朴な願い。“小康”を得た今日、先祖に感謝し、今後は病なく、水害もない日々を送ることになれば、これに増した幸せはない。理水將軍、三世先祖と古今の名高い医者二人を祭る由縁である。

(9月15日)九時、宣巻が行われることを耳にした村の女性たちが一斉に集まって来た。年のころは五十前後から七十後半ぐらいか。彼女たちの手によって脚立式の卓脚が2つ並べられ、その上に平たい板(1m×3m)が置かれた。板上には「奉敬華陀菩薩念佛板」と記されてい

る。女性たちはそれを取り囲み、手に数珠を持ち、「阿弥陀佛」を念じ始めた。それは、本日の宣卷の始まりを意味していた（写真7）。

開場は平卷佛調で「阿弥陀佛」が念じられ、“的角板”という長四角の板を細い棒で叩きながら、「蓮花落調」で縁起が祝われる。この縁起の内容は、前掲の演劇の三例と同じである。ついで喧卷本調で「玉鴛鴦」が唱われた。どんな内容かとたずねると、「こういうところで演じられるのは、始めは苦しくとも後はハッピーエンドというもの」という。内容的には、清末民国の題材と同様、小説、戯曲、弾詞の影響下で文学的に変化してきたものが多く、公案物、才子佳人人物が大半を占めるとされる。「玉鴛鴦」はその代表的なもので、没落した名家の秀才が、婚約者の援助によって及第、団円する。やはりこれも今日の立身出世、子孫繁栄の願望とも合致するのである。

「玉鴛鴦」の話は江蘇省揚州府が舞台。貧しい蔡炳清なる者が、極貧の中、洛陽にいる叔父、王忠道を尋ねて行くが、その妻魏氏に冷遇され、辛苦をなめつくしたのち、ついに王家のいとこと結ばれるというもの。蘇州弾詞などで有名な「珍珠塔」（注12）と類似したストーリーである。越劇の《方玉娘祭塔》でもこの曲を唱うことからすれば、江南一帯でよく知られた曲目である。最後に、「为官须要多清正、不可屈打害良民、若有僧道来抄化、減口齐生救穷人。你们夫妻要和睦、夫唱妻随过光阴」と、官として、僧として、そして夫婦としてのあるべき姿を説き、話は終わる。

澤田瑞穂氏は民間の宣卷について「江浙一帯では宣卷はまた説因果ともよばれ、鑊鑼を伴奏として茶店などで唱われた」と言い、顧頡剛の『孟姜女故事研究集』第三冊『南曲譜及民衆芸術中之孟姜女』の一文「蘇州地方では宣卷と説因果とはまた別人で、宣卷は一人が主となり、三四人が輔となる。主となる者が卷文を宣読すると、輔者がその一句を読み終わるのを俟って仏名一声を和する。伴奏楽器は木魚と小さな磬（銅鉢）である。ところが説因果は兩人対唱で、一人が緯板を執り、一人が銅片を執り、相和して歌うもので、蘇州城内では玄妙観でおこなわれ、『珍珠塔』などを説いた云々」（注13）を引用しているが、今回目にしたのは、前半は宣卷、後半は説因果であり、楽器は銅鑼や哨呐（チャルメラ）、二胡が用いられ、演劇要素がかなり加えられたものであることが見て取れる。仏事としての形式をまね、しかしながら娯楽的な色彩を強めているのである。

メンバーは演者三人と楽器担当一人の四人一組であり、王荷花（元紹興劇団員、退職。主たる唱者、50代）、魯徳英（幼い時から宝卷調を耳にし、これまで正式の職に就いたことはなく、グループに参加。蓮花調を唱う、20代）、金国芳（元越劇団員、リストラされ、グループの一員に。主に旦役、越調を唱う、40代）、趙張夫（楽器担当、元劇団員、リストラされ、グループの一員に、40代）によって構成されている。用いるテキストは抄本を複写したものであるが、テキストの中にはスラッシュ、ダブルスラッシュ、トリプルスラッシュの記しがあり、それぞれの役割に従い、三人の演者が唱い分けることを明示している（写真8）。

このグループの唱宝卷の特徴は、

- ① 表（第三者による情景、人物描写）、白（せりふ）、唱（うた）があること。
- ② 阿弥陀仏と南無阿弥陀仏で始まり、同二句で終わる。
- ③ 唱も適当にことばを補って唱い、ある程度の融通性がある。
- ④ 三人の唱い手はテキストから目を離さず、間断なく担当分を唱い次ぐ。また、和すこともある。

- ⑤ 楽器担当者は二胡、唢呐をともに操る。  
 ⑥ 唱い手の二人は的角板、鏡鏡（にようはち）、京鑼（どら）、小鑼の打楽器で伴奏をとる。  
 などである。

この日は同行の謝氏が開いた宣巻で、とりたてた目的もなく、いわば私という遠来の客の為にいつものように一席演じてくれと、職場仲間だった王荷花に頼んでくれたものだった。彼女たちはいつもこうするのだと、幾つかの台本を机に置き、選ぶようにと謝氏を促した。「沉看扇」上下本、「双状元」、「双花」、「何文秀」、「碧玉簪」などの宝巻テキストが並べられた。他にも「包公出世」、「売花龍図」、「売水龍図」などがあるというが、「沉看扇」の末尾に記された「我兒得中状元郎、又與賢者兩成親、双喜臨門到徐家、為娘心中也歎暢」が如実に示すように、出世と幸福とを手にする物語が主流であった。テキストのほとんどは民国のものである。(文革の)「破四旧(四旧打破の運動)」を乗り切った理由について質すと、民間にまで打破の手は及ばなかったからという。こうして「健康で災害なく、家族仲睦まじく」、即ち禳災造福という庶民の希求の活動が、宣巻という形を借りて脈々と受け継がれてきたのである。

### 7：おわりに——劇場での地方劇——

慌しく過ぎた紹興最後の夜。紹興市延安東路の紹劇芸術中心劇場で、浙江紹劇団による紹劇「真假孫悟空」の内部上演会を目にする機会を得た(写真10)。証明やセット、音楽までも「西洋化」され、慷慨激昂を表す旋律だけが、わずかに紹劇であることを教えてくれた。招待日ということで埋め尽くされていた観客席ではあったが、拍手はまばらだった。精巧なマイクロフォンのつんざくばかりの音が耳に残り、伝統劇や村芝居のもつ雰囲気はそこにはなかった。今日の劇場芝居は、少なくとも観客との関係において、脈々と受け継がれる草台(露台)、廟台の熱気には遠く及ばない。即ち、地方劇がその地方の劇である限り、庶民の生活と密接にかかわりあう相互交流のなかでこそ、その生き生きとした生命を保ち得るのかもしれない。

中国の地方劇の多くは、神への奉納と娯楽の二つの要素をもって発展してきた。清末、民国には、地方劇が北京に行き、上海に行き、市場演劇として全国に遍くことがあったが、庶民の日常と切り離された劇場の芝居はその洗練さ、芸術性の高まりとともに、民間演劇が持つ生命の根源を失っていった。

中華人民共和国成立後は、国に保護され国の文化統制の路線の中で地方劇も利用されてきた側面を持つ。確かに、国に保護されることによって、底辺の生活に甘んじてきた俳優や劇場関係者は、生活の不安が取り除かれたこともあった(注14)。また、今日まで連がる後継者の養成という面においても、国家の保護は功を奏したともいえる。

しかしながら、今日の地方劇の再興をみれば、地方劇は人々の生活の中でこそ生き得るものであることを知る。今日の興隆の背景として、①(主催者の側面から)経済の安定、②(俳優の側面から)中華人民共和国成立以後、継続して行った地方劇担当者(後継者)の養成、③(主催地及び観客の側面から)人の流動が少なく旧態然としている村落構造などを指摘できよう。しかし、④人間の心にある神への祈り、神への恐れが、願解き(「還願」)の芝居を再興させたことが根底にあることも疑いがないだろう。

では、今後地方劇はどのように存在していくのか。復興を求める世代の多くは、かつて村芝居を享受した世代であり、その復興は郷愁に根ざしているがゆえに一時的なものであり、衰退に向かい、やがて消滅すると言えるであろうか。

それは、否とってよいだろう。経済の成長が進み、知識を習得した人々が相対的に多くなったとしても、農村に住む人々の、自然に対する、或は、人間存在そのものに対する不安感は払拭されまい。それゆえ人々は神に祈る行為を捨て去ることはなく、同時に共に存在する人々との一体感を求める心理が消え失せることはないであろう。人々は、しばし現実を忘れ、艱難困苦の末に理想をかなえてくれる舞台に心躍らせ、自然の中で熟知した人々とともに時間と空間を共有することを求め続ける、と思われるのである。

## 注

- (注1) 磯部祐子著「生き続ける宝卷(上)(下)」(『東方』188号、189号所収 1996年)  
 (注2) 謝涌涛・高軍著「紹興古戲台」(上海社会科学院出版社発行、2000年)  
 (注3) 謝涌涛著「戯場餘墨—戯曲美術論文集」(遠方出版社発行、2003年)  
 (注4) 裘士雄著「魯迅筆下の紹興風情」(浙江教育出版社発行、1985年)。その訳書として、木山英雄訳『魯迅の紹興』(岩波書店発行、1990年)がある。  
 (注5) 田仲一成著「明清の戯曲」(創文社発行、2000年)  
 (注6) 磯部祐子著「紹興老芸人探訪記—1900年代」(『中国地方劇初探』第二章、「中国地方劇をめぐる諸問題」多賀出版発行、1992年)  
 (注7) 謝涌涛著「戯曲的民俗性及其趨時効応」(『戯文第3期』、1995年)  
 (注8) 「紹興晩報1994年2月17日版」掲載記事。  
 (注9) 前掲(注4)参照。  
 (注10) 車錫倫著「中国宝卷研究論集」(学海出版社印行、1997年)  
 (注11) 前掲(注1)参照。  
 (注12) 澤田瑞穂著「増補寶卷の研究」(国書刊行会発行 1975年)に珍珠塔宝卷が紹介されている。

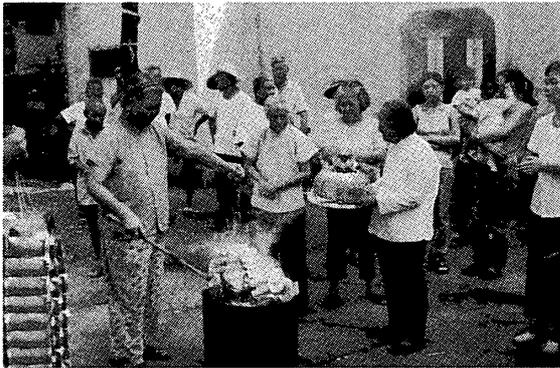
ストーリーをまとめれば以下のようなものである。

明の河南開封府祥符県太平邨の方卿、字は子文。父は吏部尚書の職を拝した高官であったが、奸臣に陥れられて死し、母の楊氏は年も六十に近い。方卿十八歳、不幸にもしばしば火災に遭って家を失い、母子して墓守の小屋に住んでいた。このままではどうにもならないと、方卿は黄州および襄陽の知友親戚を頼って旅立ったが、黄州の知人は不在で金は借りられず、やむなく親戚陳廉を訪ねた。陳廉はもと御史の職にあったが、今は退官して隠居の身分である。婦人方氏は方卿の叔母にあたり、翠娥という娘が一人ある。陳廉は亡き方尚書に世話になった恩を思い、方卿の面倒を見ようと考えていたが、虚栄心の強い夫人とは意見が合わなかった。さて陳公五十歳の誕生祝に大勢の客人が慶賀に集まっているとき、乞食風態の方卿が陳邸を訪ねて来た。夫人はそのみすほらしさに眉をひそめ、無常にも甥を辱かして追い返してしまった。令嬢の翠娥はひそかに裏庭で方卿と会い、旅費代りに珍珠の宝塔一座を贈って別れた。方卿の去ったことを後で聞かされた陳公は驚いて馬で追いかけて、九松亭という茶店で会って連れ戻そうとしたが方卿は承知せず、やむなく翠娥との結婚を約して袂別した。方卿は帰途、黄州城の附近で邱六喬という強盗に珠塔を奪われ、雪の中に打倒されてしまった。それを、たまたまここに船がかりしていた南昌県の畢云頭という官員に救われ、畢氏の郷里南昌に伴われて、しばらく世話になるうち、云頭の妹秀金の婿にと懇望された。河南の老母は息子の行方を案じ、乞食同然になって襄陽目指して旅する途中、強盗邱六喬が捕縛され、奪った珠塔のことから方卿の生死が危ぶまれているという噂話を耳にして、絶望のあまり投身しようとしたところを、白雲庵の尼僧に救助され、そのまま庵中に住みついた。翠娥もこの件から病に臥していたが、やや快方に向ったので、願解きのため白雲庵に参詣したとき、偶然にも老母の所在を知って父の陳公に知らせた。しかし息子は殺されたと思って絶望している老母は、白雲庵を出ようとはしなかった。さて南昌で勉学していた方卿は上京して試験を受け、見事に状元に及第。官も七省査盤御史に任ぜられ、老母の行方を捜しつつ襄陽に來り、わざと道士に扮して陳家に乗りこみ、身分を秘したまま故意に方卿と名のって陳公老夫婦の前で諷刺の道情一曲唱い、特に夫人の不人情を責めた。その後で白雲庵の老母に状元合格の喜びを伝え、陳翠娥と畢秀金を娶って一夫両妻の婚姻

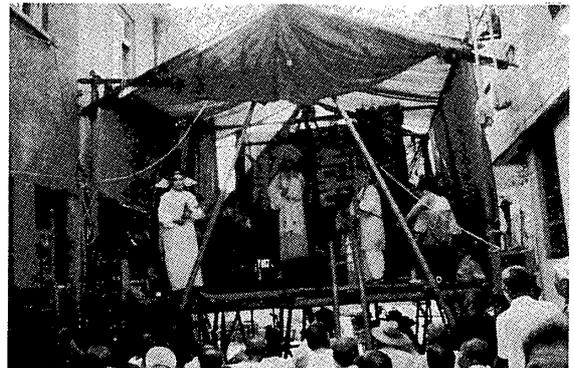
を成したばかりか、さらに陳家の次女采屏をも娶った。老母が世話になった白雲庵には一座の宝塔を建立して報謝し、塔の名も珍珠塔とつけた。老母は続いて庵中で修行すること十年の後、功満ちて仙界に迎えられた。陳廉老夫婦もこれより斎僧布施の善事につとめたので、一子を得て後に公卿となった。方脚の三人の夫人もそれぞれ子女を儲け、富貴栄華をきわめて一門繁栄した。

(注13) 同上澤田瑞穂著『増補寶巻の研究』P91に見える。

(注14) 前掲(注6)に、紹興老芸人の解放前の生活苦と解放後の生活の安定が述べられている。



(写真1) 解放娘の誕生日に元宝を持参し焼く人々



(写真2) 縁起を祝う役者たち



(写真3) 「夜明珠」の上演で親孝行を説く



(写真4) 「穆桂英挂帥」に見入る人々



(写真5) 湖神生日に、「八仙縁起」を説く



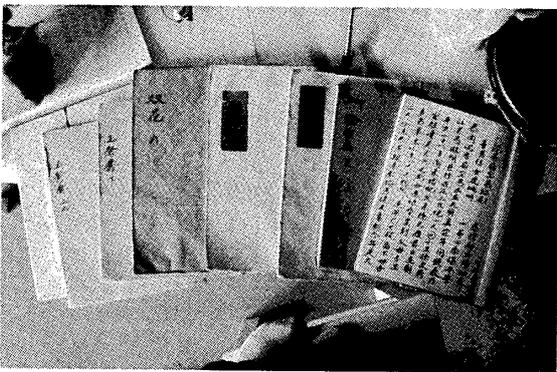
(写真6) 昼下がり「草台」に集う人々



(写真7)「奉敬華陀菩薩念佛板」で「阿弥陀佛」を念じる。



(写真8) スラッシュ、ダブルスラッシュ、トリプルスラッシュで役割分担が明示された宝巻。



(写真9) “挑選”を待つ宝巻テキスト



(写真10) 浙江紹劇団による現代化された紹劇「真假孫悟空」

## The Revival of Chinese Folk Dramas

Yuko ISOBE

### ABSTRACT

This research paper adds comments about the revival of the folk dramas in the China Zhejiang Sheng Shaoxing based on the field survey in 2003. After reformation and open door policy, the private entertainments activities, which had been suppressed under the previous system, and then showed signs of revival with economic liberalization. Since then, 20 years have passed and today, the prosperous area of folk dramas also began to be produced in Jiangnan, so that one can even imagine activity before PRC was established. This paper clarifies according to five examples that were surveyed, the various relationships between theater and religion in today's Shaoxing, traditional continuity and heterogeneity, and the moral world of people in the background.

### KEY WORD

The Revival of Chinese folk dramas, Shaoxing, the performance situation of theater, the continuity of traditions, the moral world